

心不全パンデミック ～その時、何に備えればいいのか～

循環器内科

長野 真二郎 (ながの しんじろう)

循環器内科部長

日本内科学会認定医、日本循環器学会循環器内科専門医



2020年、日本中が楽しみにしていた東京オリンピックはCOVID-19の影響により延期と決まりました。強い感染力を持ったコロナウイルスはオーバーシュートを引き起こし、一度に多くの患者が急性期医療機関に駆け込むことで医療崩壊を招き、多くの国での多数の死者を出すこととなりました。

近い将来、心不全パンデミックの危機がささやかれている今日、我々は何を備えていけばいいのでしょうか。

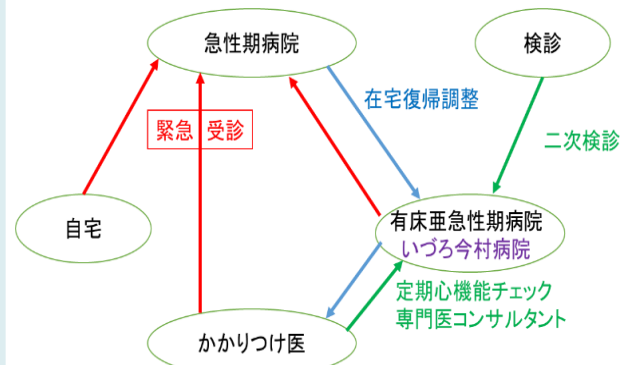
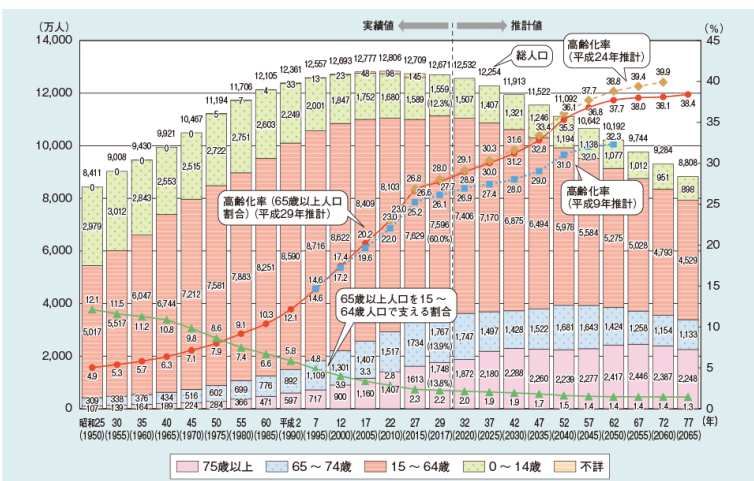
日本では医療の進歩により平均寿命をのばしたが、出生率の低下から総人口は2010年から減少に転じました。高齢化率(65歳以上)は2025年には30%、2040年には35%に達すると予想されています。75歳以上の高齢者人口も2055年まで増え続ける推計となっています。(2019年内閣府データより)

慢性心不全の発症率は50歳代で1%であるのに対し80歳以上では10%とされ、慢性心不全患者は2030年には130万人に達し、悪性疾患患者の100万人に比べても非常に多くなることが予想されています。感染症と違うところは、急性単発性ではなく慢性反復性という疾病特性にあります。入退院を繰り返し、徐々に終末期に向かっていく疾患です。急性期病院は疲弊・破綻し、救急受け入れが困難な状況に陥ることこそが、心不全パンデミックです。

ここで大事なことは、役割分担＝地域連携です。現在は急性期病院⇄かかりつけ医の患者のやり取りが主流となっています。急性期医療機関は一次救急受け入れから在宅復帰支援まで行うことで、入院期間が長くなり、急性期ベッドの浪費、医療資源の無駄遣いが行われています。また、かかりつけ医も急性期病院に対して細かな相談までしなければいけないことにストレスを感じ、相談しづらいと不安を感じる状況は、決して患者を含めても良い状況ではないと考えます。これは、急性期病院やかかりつけ医の問題ではなく、われわれ亜急性期・慢性期有床病院がその役割をいままですら果たしてこず、中途半端な競争を行ってきたことに問題があると考えます。

今、鹿児島の循環器医療は一つになろうとしています。いい意味での構造改革をこの機会に行えれば、きたる心不全パンデミックに対応できる鹿児島が見えてくると考えています。

今回、当院循環器内科は、鹿児島大学病院心臓血管内科より木佐貫彰先生、山下誠先生を迎え、これまで以上に入院診療に対応できる体制を整えることができました。先に申し上げた急性期医療機関とかかりつけ医の架け橋になれるよう、多くの相談をお待ちしています。



資料：棒グラフと実線の高齢化率については、2015年までは総務省「国勢調査」、2017年は総務省「人口推計」(平成29年10月1日確定値)、2020年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成29年推計)」の出生中位・死亡中位仮定による推計結果。

■ 発行者 ■ 公益財団法人 慈愛会 いろ今村病院 地域連携室

いろ今村病院 TEL099-226-2600(代表) いろ今村病院・地域連携室 TEL099-226-2180 FAX099-226-2181

いろ今村病院夜間かかりつけ救急 TEL099-226-5686 今村総合病院 救急・総合内科 TEL099-251-2221(代表)

薬剤部の紹介

薬剤部は薬剤師 8 名・薬剤助手 2 名が在籍しております。

薬剤部では皆さんがよくご存じの調剤室での調剤だけではなく、抗がん剤の無菌調製や ICT、NST、褥創委員会などチーム医療にも参加しています。



当院では一般急性期病棟、地域包括ケア病棟、緩和ケア病棟の 3 つの機能をもつ病棟を有していますが、それぞれの病棟に担当薬剤師を配置し、質の高い医療に貢献できるようにしています。

一般急性期病棟では病棟薬剤業務、薬剤管理指導業務を行っており患者様に治療や薬の説明、退院時の薬の説明や注意事項について指導しています。

緩和ケア病棟では、麻薬の管理や病棟スタッフとのカンファレンスに参加し、必要に応じて患者様のベッドサイドに行き、お話を聞くことでよりよい治療ができるよう努めています。

地域包括ケア病棟では、当院の特色である糖尿病の患者様に対する様々な教育入院を行っています。その中で、糖尿病教育（2 週間）コースでは「糖尿病薬の飲み薬について」「糖尿病の注射薬について」「低血糖について」の 3 コマの講義を行い、2 泊 3 日の腎保護コースでも講義を行っています。

薬剤部のうち 4 名が日本糖尿病療養指導士の資格を取得し、薬だけではなく幅広い知識を持ち、糖尿病の患者様の療養指導に役立てるよう努めています。

また、IBD（炎症性腸疾患）の患者様に対しては医師、薬剤師、看護師、栄養士、リハビリスタッフなど他職種で症例検討や勉強会を行い、患者様の治療にあたっています。

2019 年度 4 名、2018 年度 4 名と薬学部 5 年生の実務実習の学生を受け入れ、学生の指導、教育も行っています。

私たち薬剤部は、患者様が安心して治療をうけられるよう薬剤師の職能を活かし、チーム医療に貢献するという理念のもと毎日の業務に励んでいます。



CDE チーム

